

継母の心得7

◆イザベル

マンガ「氷雪の英雄と聖光の宝玉」に出てくる悪辣継母キャラとして転生した元日本人。前世の知識を活用して次々と新商品を作り出し、この世界に旋風を巻き起こしている。

◆テオバルド

ディバイン公爵家の当主で、イザベルの夫。極度の女嫌いだったが、今はイザベルを溺愛している。

◆マルグレート

グランニッシュ帝国の皇后で、イーニアスの実母。イザベルの親友。

◆ネロウディアス

グランニッシュ帝国の皇帝。家族を溺愛している。料理・裁縫が得意で、イザベルのママ友。

◆イーニアス

グランニッシュ帝国第二皇子。ノアの親友。

◆ペーちゃん

ディバイン公爵家に保護された赤ちゃん。どうやら前世の記憶があるようだ……

◆ノア

ディバイン公爵家の跡継ぎ。イザベルのことが大好き。

目次

継母の心得 7

7

呪いのブルーダイヤ

275

継母の心得7

プロローグ

夜、照明を全て消した部屋に、暖炉の温かな光が広がり、影を揺らす。

夜間勤務の使用人たちはできるだけ物音を立てないように働いているのだろう。随分と静かだ。

そんな中、わたくし——イザベル・ドーラ・ディバインは窓辺に寄り、高度な技術で織られたジャカードのカーテンを開く。冷たい空気が顔を撫でた。

あたりは静寂に包まれている。しんと降り降る雪はバルコニーを白く染め、まるで世界に一人だけ取り残されたような気分になった。

部屋の中は暖かいけれど、窓辺はさすがに冷えますわね。

ぶるつと震え、わたくしは羽織をかけ直して息を吐いた。少し膨らんだお腹に手を当ててから、カーテンを開けて振り返ると、ベッドには先程寝入ったノアがいる。その穏やかな寝姿に安堵するのも何度目か。

『おもちゃの宝箱』で、ノアを誘拐された事件が未だ、わたくしの心に影を落としていた。

もしあの時、妖精のチロがノアのそばにいなかったらどうなっていたことか。もしあの時、影が間に合わなければノアは……などと、ふいに思い出しては恐怖に襲われる。常にノアの姿を探してし

まう自分に気付き、これではダメだと首を横に振った。

「う……かぁ……さま……」

その時、ノアの声が耳に届いた。

「ノア……？」

今、わたくしのことを呼んだ……？

そばに寄ると、ノアは額に汗をかき、うなされているではないか。小さな声でずっと「おかあさま……、おかあさま……つ」とわたくしを呼ぶ姿に胸が締め付けられた。誘拐された時の恐怖は、やはり幼い息子の心に傷を残したのだ。

「ノア、もう大丈夫よ。わたくしはここにおりますわ」

ぎゅつと握られた小さな手を両手で包み、声をかける。

このやり取りは、ここ数日、続いていた。

わたくしは、ノアの心を傷つけた事件を、そして犯人を、許せませんわ。だけどそれ以上に、あの時なにもできなかったわたくし自身が許せない。

「この子のためになができるかしら……」

わたくしがそばに来たことがわかったのかしら。苦しそうな表情が和らいで、頬に赤味もさしてきた。ノアの小さな手から温かな体温が伝わってきて、甘いホットミルクを飲んだ時のように幸せな気持ちがいじわりと広がっていく。

最近はいっかかりしたお兄ちゃんになってきて、誇らし^ほくもほんの少し寂しいと思っていたのだけ

れど……

「寝顔はまだまだ赤ちゃんのようすわ」

ぷにぷに、ふわふわのほっぺをチョンツと指で突っついて、赤ん坊の頃のノアを想像して癒やされる。

赤ちゃんのノア……絶対可愛かったに違いありませんわ！

「可愛いといえば、ノアが連れ帰った赤ちゃんも、とっても可愛いんですよ——」

第一章 悪女とペーちゃん

ぷー、ぷー……

先程から聞こえてくるこの可愛い音は、わたくしの目の前にあるベビーベッドから出ている。たんぽぽの綿毛わたげのような、ふわふわとした髪の毛に、ノアよりぷっくりしているほっぺた。むちむちした手足と、ほんのりとするミルクの匂い。音の正体はそう、赤ちゃんの寝息だ。

「ペーちゃんったら、可愛い寝息を立てておりますわ」

ノアが連れ帰ったこの赤ん坊——名前はペーちゃんというのだそうだが、ノアを誘拐した組織に囚とらわれていた子供とのことで、現在わたくしの夫であるテオバルド様——テオ様が親御さんを探してくれている。

ペーちゃんというのだから、本当の名前にはpegがつくのだろう。

ペーターとか、ペンタゴンとか、そんな感じの名前なのかしら。

年は一歳ぐらいの可愛い盛りだ。きつと今頃、親御さんも必死になつて探しているに違いない。わたくしもノアが誘拐されている間、生きた心地がしなかったですもの。ペーちゃんの親御さんの気持ちを思うと、胸が締め付けられますわ。

そのペーちゃんだが、ディバイン公爵家の領地にあるこの本邸に来てから一日経った今も、まだ

眠ったままだ。

もちろんお医者様にも診察してもらったが、特に異常はないとのことだった。ただ、少し衰弱しているの、基本的にはこのまま寝かせておき、あまりに長く眠り続けるようなら、起こしてミルクや離乳食を与えるように言われている。

ノアも疲弊^{ひへい}しているのか、ペーちゃんと同じように起きないから心配ですわ。

「そろそろ起こした方がいいのかしら……」

落ち着きなく眺めながら、腕を組んで首を傾げる。わたくしのそんな様子を見かねたのか、専属侍女のミランダにも促^{うなが}されたので、まずはペーちゃんを起こすことにした。

「……ペーちゃん、ペーちゃん……？ おつきできるかしら？」

「う……むにゅ……」

小さな反応があったので、驚かせないように優しく、ペーちゃんの身体をポンポンしてみる。

「う……む、にゃ……」

猫みたいな声ですわ。なんて可愛いの……っ。

「ペーちゃん、そろそろおつきして、まんま食べましょう？」

「う……」

ぐぐつと腕を上げてバンザイの体勢をとり、ふるふる震えて大きなあくびをすると、ペーちゃんはおつすら目を開ける。わたくしはほっと息を吐いた。

「お腹は空いていないかしら？」

一歳くらいなら、離乳食でも大丈夫ですわよね？

「あう……あ……っ（な、な……っ）」

ペーちゃんがわたくしを見て、おめめをまん丸にするものだから、驚かせてしまったかと少し申し訳なくなる。

「あらあら、まん丸おめめ。おつきしたら知らない人がいてびっくりしてしまったのね」

隣にいるミランダもペーちゃんの顔を覗^{のぞ}き込む。

「固まっていますね。もしかしたら、奥様のあまりの美しさに驚いているのではないでしょうか」

「そんなバカな」

いつも感情を表に出さないミランダは、今日も今日とて無表情で、そんなおかしなことを呟^{ささや}き、頷^{うなづ}いている。

「あう……、にゃ、じゃえ、いじゃ……!?（なんで……、なんでイザベル・ドーラ・ディバインが、私の目の前にいるんだ!?）」

ペーちゃんは相変わらず大混乱継続中ですわね。ご飯を食べさせて、落ち着かせた方がいいかもしれないわね。

「ミランダ、さつきシェフに作ってもらった離乳食を持ってきてもらえるかしら」

「かしこまりました。奥様」

「にゃ……」

うるんだ目で怯えたように見上げてくる様は、まるで子猫のようで庇護欲^{ひごよく}を掻き立てられる。

「ペーちゃん、わたくしはノアの母でイザベルと申しますわ」

「うあ……、あく、ちょ!! (ひえ!) や、やっぱりあの、悪魔と手を組んだ悪女だ!! なんて私の名を知っている!?」

「え? もしかして、握手って言いましたの?」

「ちあー! あく、ちょ!! (違う! 悪女と言ったんだ!! こっちに来るなっ)」

「まあ、皆見てちょうだい! 握手って言って、可愛いおててをこちらに出しておりますのよ!」

ノアの名前を出したからか、ペーちゃんは、小さな手をわたくしに差し出してきたのだ。礼儀正しい赤ちゃんですね。可愛い。

「本当ですね!」

「可愛い〜!」

周囲にいたメイドたちも、赤ん坊の可愛さにメロメロだ。

「にゃ! じゃーきゃ! (勘違いも甚だしいぞ! 誰が悪女に握手を求めるか!)」

「ペーちゃん、よろしくお願いしますわね」

「にゃ……!？」

「はい、握手」

そう言いながら、ペーちゃんの手を取り、握手を交わす。ノアよりも小さな手はぷにぷにでも可愛らしい。

「うにゃ、ちゃ!? (一見いい人そうに思わせて、実は私を売る気だな!)」

「ふふっ、ノアの言っていたとおり、にゃんこのようなお返事をしますのね」
「によあ!」

ノアの名前を出すと、ペーちゃんは突然、赤ちゃん用の布団を撥ね除け、四つん這いになる。そして顔をキョロキョロさせ、ノアを探し始めたではないか。

「ちょーや、によあ!? みゃちゃ、あにやつ (そうだ、ノアはどこだ!? まさか、お前が虐めているんじゃないだろうなっ)」

なにか一生懸命お喋りしているのだけれど、なにをお話しているのかわかりませんわ。

困惑してメイドたちを見るが、皆もわからないようで、笑って誤魔化している。

すると、ペーちゃんは布団をぼふぼふしながら首を傾げ始めた。もしかして、布団が気に入ったのだろうか。

「うにゅ……」

そしてまた周りの大人たちに目を向け、ベビーベッドを見てを繰り返す。その行動は、まるで自分のいるところを確認しているようだった。

まだ誘拐されていると思っているのかしら。あら、今度はわたくしを見て真っ赤になって……汗が出始めておりますわ!

「まあ、暑くなっちゃったかしら。寝汗もかいておりますものね」

オムツは眠っている間に変えたから大丈夫だと思うけど。

メイドから受け取ったタオルでペーちゃんの顔や首を拭いていく。

「ふあ、ふあ……（ふかふかタオル。気持ちいい……）」

「ふわふわですわね。気持ちよさそうですわ」

タオルの感触が気に入ったらしく、液体のようにとろけるペーちゃんに思わず笑ってしまう。

「奥様、お待たせいたしました」

その時、ミランダが戻ってきて、机と椅子のセットを始めた。

「ありがとう。ミランダ」

セットされた机には、離乳食とは思えないほど美味しそうな料理が並べられていた。

「さあ、ペーちゃん。お腹が空いておりますでしょう。ご飯を食べましょうね」

「うにゃ」

小さな鼻をひくひくさせていたペーちゃんの目が、料理を見て輝く。

「ちゃべ、うー」

「ふふつ、ノアが昔使っていた赤ちゃん用の椅子と机を持ってきてもらいましたのよ。ここに座って食べましょうね」

「あーい」

「いいお返事ですわ」

余程お腹が空いていたのだろう。ベビーベッドから一生懸命手を伸ばしている。

抱き上げて、ノアが使っていたという赤ちゃん用の椅子に座らせると、ペーちゃんは目の前に並べられた離乳食に、また鼻をひくひくさせた。その様が可愛くて、笑い声が漏れてしまう。

ペーちゃんは、わたくしの笑い声にくすぐったそうに身体をよじる。

ふふつ、ペーちゃんったら、照れているのかしら。

「さ、ペーちゃん。あーん」

「あゝ」

いつも食べさせてもらっているのだろう。声をかけると、口を開けて食べ物が運ばれてくるのを待っている。

嫌がられなくて良かったですわ。

「はい、ぱつくん」

「にゃつくう」

ペーちゃんは目をカッと見開き、ぷるぷると震え出す。

「うっ、にゃゝい！（美味い！）」

「美味しい？ 気に入ってもらえて良かったですわ」

「あーい」

感情表現が豊かな赤ちゃんですわね。本当に美味しそうに食べていて、微笑ましいわあ。

それにしても、さすが公爵家のシェフだわ。まさか離乳食までこんなに美味しそうに作れるなんて……。『ディバイン公爵家には、世界の美味しい食材が集まる』なんて料理人たちが言っていたけれど、世界トップレベルの料理人がいるからこそ、食材も生きるといふものだわ。前世で美味しい料理をたくさんいただいたけれど、それを再現できるのはシェフたちのおかげですもの。わたく

し、体力も魔力も平凡ですけど、対人運だけは最強ですわね！

「まあんま、うつ、にゃ〜い」

残さず綺麗に食べ切ったペーちゃんは、満足そうに、口からけづつと可愛い音を出す。

あらあら、離乳食が口の周りにべったべたに付いておりますわ。

「ふあ、ふあつ、ちゅつき！ まあんま、ちゅつき！（ふかふかのタオル好きだ！ 美味しいご飯も、好きだ！）」

赤ちゃんの肌にも優しいふわふわフェイスタオルで拭いてあげると、タオルの感触が気持ち良かったのか、嬉しそうに声を上げた。

衰弱していると聞いていたから心配だったけれど、食欲はあるようで安堵する。

「ふふつ、お腹いっぱいですわね」

「ぺえちゃ、おにゃあきや、いーっぱい！」

か、可愛いですわ！

フロちゃんこと、フローレンスよりも小さな赤ちゃんが、満足そうに、ぽっこり出ているお腹を叩くその様子は、使用人たちも目尻を下げるほど可愛らしい。

ちなみに今、ペーちゃんがいるこの部屋には、ベビーベッドをはじめとする赤ちゃん用の家具や服が詰め込まれている。これから生まれてくる赤ちゃんのためにと、テオ様が用意したものだ。準備が早すぎると引いていたのだが、まさかこんなところで役に立つとは……

「あゝ、によあ！」

扉の方を見たペーちゃんが、嬉しそうに声を上げた。

「ペーちゃん！」

扉から顔を覗かせた天使——私の愛しい息子ノアが、ペーちゃんの名前を言いながら嬉しそうに入ってくるのではないか。

良かった……っ。ノアも元気そうですわ。でも——

「こおら、ノア。ノックを忘れていますわよ」

「あ……、おかあさま、ごめんなさい……」

くっ、この上目遣いの可愛さ！ ダメよイザベル。注意するべき時はちゃんとしないと……む、無理い！ この可愛さ、この素直さには、これ以上なにも言えせんわ!!

「によあ、いちめ、つちゃ、めえ！」

「あらあら」

ノアを注意したら、わたくし、ペーちゃんに怒られてしまいましたわ。

「ペーちゃん、おかあさま、めっ、しないのよ」

「によあ？」

ノアの言葉が思いもよらなかったのか、ペーちゃんがきょとんとして、目をぱちぱちさせる。

「あのね、わたし、ノック、わしゅれたの。わたし、めっなのよ」
わたくしのノア！ なんて健気で素直でいい子なのでしょうっ。

「ノアはなにがいけなかったのか、ちゃんとわかっていますのね。でしたらお母様は、めっ、しま

せんわ。だってノアはとってもいい子ですもの」

頭を撫でると、「ちゅぎから、きょーちゅけますー!」と抱きついてくるので可愛くて仕方がない。

「もうっ、いい子すぎますわ!」

ぎゅうつと抱きしめ返すと、「うふふっ、おかあさま、くるちいのよ」なんて言いながら、嬉しそうに笑いますのよ。

「にゃ……?」

ペーちゃんが驚いたのか、目をパチクリさせていますわね。本当に子猫みたいな子。

「ペーちゃん、もうこわいなのよ。ここ、わたしのおーちな」

「によあ、ち……」

「しょう。わたしの、おかあさま」

ノアがわたくしの手を取って、ペーちゃんに紹介してくれる。

「おかあさま、とーつても、やさちい。わたしの、だいすきなおかあさま!」

「にゃ!」

「だから、こわいなの」

怖くないから安心して、と赤ちゃんを宥めて、ノアがお兄ちゃんの顔をしたので、わたくし感動してしまいましたわ!

「によあ……」

「だいじょぶよ。こわいちと、もうない」

「こあい、にゃい……?」

SIDE ペーちゃん

ああ、離乳食がこんなに美味いなんて……。ディバイン公爵家の料理人は天才か! とご飯に気を取られ、あの悪女イザベル・ドーラ・ディバインのことが頭から飛んでいた。気付けば悪女に顔を拭かれて、あまりの気持ち良さに液体と化していた自分を殴りたい。

ふわふわのタオルで籠絡してくるとは、なんと狡猾な! 前世とは全く違う姿を見せて、こちらの油断を誘う気にいるようだが、そうはいかないんだからな! 私には英雄ノアがついている!

ちよūdノアが部屋に入ってきたことで我に返った。籠絡されずに済んだ、とホッとしていたら、あろうことか悪女はノアを叱りつけたのだ。

やっぱり前世のようにノアを虐待している!

許せないと思ひ声を荒らげたのだが……まさか、ノアに止められるなんて……

信じられないことに、ノアは悪女のことを『優しくて、大好きなお母様』だと嬉しそうに言うではないか。まさか、洗脳されてしまったのか……?

だけどノアの目はきらきらしていて、とても虐待と洗脳をされているようには見えなかった。

「怖くない」と優しく声をかけてくれるノアは、前世の英雄ノアそのもの。どうもおかしいと、悪

女に目を移すと、こちらも優しい眼差しを向けてくる。

こんな時は、私の特異魔法『鑑定』を使うしかない！

悪女よ、お前の嘘を見破ってやるからな！

鑑定！！

名前…イザベル・ドーラ・デイベイン

年齢…20

種族…※q@※ry&・

家族構成…夫、息子、父、弟

レベル…21／平均値26～40

体力…55／平均値65～100

魔力…280／平均値150～300

魔法属性…闇／状態…封印

&※#@xの女神の加護、※q#@の加護、ry&・X神獣の加護あり、世界の回帰の主軸
スキル…異世界の知識、夢渡り、精神治療（小）



ペーちゃんはわたくしをじっと見て、「にや……？」と怪訝な顔をしたかと思うと、徐々に目を
見開いていき……

「みえ、みえ……っ、ちいじゅ……」と子猫のように鳴いたあと、チーズと言い放って、突然眠っ
てしまったのだ。

チーズが食べたかったのかしら？

「おかあさま、ペーちゃん、ねんねちたの」

「そ、そうね。ご飯をたくさん食べたから、眠くなってしまったのかしらね」

なんだかわたくしの顔を見ながら、気絶したようにも見えたけれど……、まさかね。

SIDE 大司教クレオ

「大司教、お待ちください！ もし騎士団に搜索願いを出せば、それを理由に教会の内部へ騎士団
の立ち入りを許してしまうことになります！ あのような粗暴な者たちをこの神聖な場所へ招くな
ど、神への冒瀆ぼうとくです！！」

フェリクス——私の養い子である赤子の行方ゆくえがわからないというのに、愚かなことを主張する
司祭にうんざりする。

騎士団の出入りが神への冒瀆ぼうとくというのならば、お前のような欲に塗れた者の出入りを許す方が余

程神への冒瀆ではないか。やれやれ、あやつの影響がここまで広がっていったとは……

仕事の間は、シスターにフェリクスのお話を任せていた。ところが、様子を見に行った際に二人の姿が見えないことに気付き、教会中を探し回った。しかし教会内のどこにもフェリクスの姿はなく、すぐに騎士団へ連絡しようとしたのじゃが……そこに邪魔が入った。

「それがどうしたというのか。やましいことがあるわけでもない。フェリクスの行方がわかるのであれば、喜んで騎士団を迎えようではないか」

「大司教！ なりませんっ、たかが孤児の赤子がなくなったぐらいで、教会内部に騎士団を入れてしまつては、教会の立場が……っ」

たかが、孤児の赤子じゃと……!!

「フェリクスは私の大切な孫で、『神託の子』。おぬしらよりも余程大事な子供よ！」

「ぐ……っ」

いかん。私としたことが、フェリクスを悪く言われてつい、本当のことを言つて……いや、言ひすぎてもうた。

騒ぎ立てていた司祭は、怒りで顔を真っ赤にし、震えている。

なんなのだ、その態度は。排他意識が強いこやつに反省は見られんな。フンッ、今のでも言い足りなかったか。もつと言つてやれば良かったのう。

「……大司教、確かに我々にやましいことはございません。しかし教会の権威が弱まっている今、騎士団に教会内部の捜査を許可してしまえば、世間は教会がグランニッシュ帝国の下にいたと認

識するでしょう。教会は国から独立した組織であり、決して国の支配下にあつてはならないのです。そのようなことになれば、この国、いえ、世界のバランスを大きく崩すことになりかねません」

司祭の上司にあたる司教が見してくるので、思わず睨んでしまったわい。

司教の言うように、現在のグランニッシュ帝国の権力構成は、皇室、教会、ディバイン公爵家の三つ巴。それが一年前、シモンズ伯爵家の娘がディバイン公爵家に入ったことで、比重がディバイン公爵家に大きく傾いてしまった。

じゃが、ディバイン公爵家は皇室を支持し、決して裏切らないと誓つて魔法契約までおこなつているという噂じゃ。だからこそ、かろうじてバランスが保たれておる。

しかし、ここで大司教である私が、教会に騎士団を招いてしまえば、こやつの言うようにバランスが崩れる可能性は高い。最悪、教会を私物化したとして、グランニッシュ帝国が各国から攻め込まれる理由を作ってしまうかねん。そうなるのだいぶ物騒な話になるじゃろう。

「大司教、ご配慮いただきますよう、平にお願い申し上げます」

「わかった……」

フェリクス……っ。

「ご理解賜り感謝いたします」

ならば、私個人が、国ではなく、ディバイン公爵に頼めばよい。ディバイン公爵家は軍事を司る。思慮深い公爵のこと、秘密裏に動いてくれるじゃろうて。すぐに帝都を出発すれば、一週間ほどでディバイン公爵領に着く。誘拐犯があの子の能力を欲しているのであれば、命を奪つたりはせぬだ

ろう。なんとしてでも無事にフェリクスを取り戻さねば……

「フェリクス……ただでさえ怖がりなのに、今頃どんなに泣いておることか……っ」

孫を救い出さんと帝都の教会を飛び出し、馬車に揺られて一週間。

「さすがに老体にはこたえる……」

馬車の揺れは思ったよりも体力を消耗させた。本当ならもっと早くディバイン公爵領に到着したかったのだが、若い時のようにはいかない。

もちろん先づれば、教会を飛び出す際に出しておいた。だからなのじやろう、領都の門を潜ると公爵家の騎士が数人待ち構えており、私の馬車を公爵邸の前まで先導してくれたのだ。

「な、なんと……っ、公爵がフェリクスを保護してくださったのですか!!」

公爵邸に入るとすぐに公爵のもとに通され、面会が叶う。その時には私の頭の中はフェリクスのことであっただけだった。

なにしろ誘拐されて一週間以上経っているのだ。心配で、心配で、胸が張り裂けそうだった。だから公爵に会った途端、貴族の挨拶などすっ飛ばし、孫が行方不明なのだと思死に状況を伝えたのだ。恥も外聞もない。私は今、大司教などではなく、フェリクスのただ一人の祖父なのだ。そうして知った、公爵がフェリクスを保護しているという事実。

おお……っ、創造神様、感謝いたします……っ。

「フェリクスは、フェリクスは無事でしょうか!? 怪我はしておりませんでしたかな!? 熱を出し

たり、気絶したりしませんでしたか!? あの子は怖がりな性格ですから、泣いているのではありませんか!」

まくしたてるように聞いてしまったからか、氷の大公と呼ばれる公爵が、目を見開いて驚いていた。が、すぐに常の無表情になって、質問に答えてくれる。

「怪我などなく、熱もない。念のため医師に診察させたが、いたって健康だそうだ」

「ああ……っ、良かった……フェリクス……!!」

「ただ、二度ほど気絶をしたようだが……なにかの持病でもあるのか?」

公爵の話でフェリクスが鑑定を使用したことを察知し、溜め息が出そうになる。

あの子の特異魔法は酷く魔力を消耗する。しかも、ノミの心臓なのか、驚くほど臆病なのじゃ……。そうなると、すぐ気絶してしまうんじゃないかな……

「二度、気絶しましたか。なるほど……フェリクス……」

孫よ……じーじはあれほど、鑑定を使用するでない、と言っていたじやろう。見てみなさい。公爵のこの不審そうな顔を。

いかん。恥ずかしくなってきたしもうた。



公爵家のもふもふとした寝心地抜群のお布団、ふわふわのタオル、そして美味しい離乳食。これ

ら全てをペーちゃんが気に入ってくれたようでとても微笑ましいのだけれど、中でも虜とりこになったものがありますのよ。それは――

「ペーちゃんは抱っこが好きですのね」

「あーい」

わたくしの抱っこ……ではなく――

「抱っこ紐ひもなら、ノアも赤ちゃんを楽に抱っこできますわね」

「はい！」

抱っこ紐ひもを使用して抱っこしているノアの腕の中で、ペーちゃんは嬉しそうに笑っている。

「によあ」

「ペーちゃん、だっこ、いたくない？」

「にやー！」

幸せそうな表情ですわ。まさかペーちゃんが虜とりこになったのが、ノアの抱っこだなんて。二人は仲良しなのね。それにしても、小さな子供が赤ちゃんを抱っこする姿って、可愛いですわよね。

最初は好奇心旺盛おうせいなノアが抱っこ紐ひもを使わずに抱っこして、ペーちゃんの足を引きずってしまっただの。慌てて試作段階だった抱っこ紐ひもを完成させたのだけれど、役に立って良かったですわ。

「はあ……スマホがあれば……いえ、カメラがあれば写真を……っ」

わたくしが前世の道具について呟つぶやいていたからか、ペーちゃんが珍獣でも見るかのような目を向けてくる。

なんだかペーちゃんは、わたくしたちの言葉を理解しているような反応をしますわね。

「ノア様、肩は痛くありませんか？」

ノアの専属侍女であるカミラが、転んだ時に支えられるよう両手を広げて構えているのだが、その様子がまるでバスケットボールのディフェンスのようで面白い。

「カミラ、だいじょぶよ。わたし、ちかりやもち！」

「そうですね！ ノア様はとっても力持ちです」

二人の会話に、何故かペーちゃんがドヤ顔で、鼻からふんつと息を吐いた。そして両手を上げたかと思うと突然、興奮したように「う、りよ、かーん!!」と大きな声で叫んだのだ。

あらあら、抱っこが嬉しくてテンションが上がりすぎたのかしら？

「ペーちゃん、どうしたの？」

ノアが驚いて、ペーちゃんを心配そうに見るが、多分ペーちゃんの頭部しか見えていないだろう。

「あう……にやー！」

「ペーちゃん様、猫みたいに鳴いて誤魔化ごまかしていませんか？」

「ほほほっ、いやですわカミラ。赤ちゃんが誤魔化ごまかして猫のように鳴くなんて、そんなことあるわけありませんわよ」

確かにペーちゃんは猫のような声を出す時がありますけれども、まだ赤ちゃんですわよ。

「そうですよねー。赤ちゃんですもんね」

そんな会話をしていた時だ。扉がノックされ、執事長のウォルトが入ってきた。ブラックのフ

ロックコートと、グレーのストライプ入りのパンツ、ジャケットはシングルボタン。皺一つない白いシャツが清潔感をより引き立てている。いつもながら執事の鏡のような佇まいだ。

「奥様、旦那様がペーちゃん様を連れて客間に来るように、とのことです」

ウォルトはそう言つてノアとペーちゃんをチャリと見ると、少し眼差しを柔らかくする。

「まあ、もしかしてペーちゃんの保護者が見つかりましたの!？」

「うりえ、お!」

わたくしの言葉を聞いた途端、ペーちゃんが声を上げ、必死に両手を扉へと伸ばしたではないか。もしかしたらペーちゃんは、保護者が迎えに来たことがわかったのかもしれない。

「わたし、ペーちゃん、つりえてくのよ!」

そう主張する息子に根負けして、ペーちゃんを抱っこしたノアとともに客間へ向かった。

この子のご両親はどんな方なのかしら。少しドキドキしながらノックをし、客間に入ると……

「フェリクス!!」

「うりえ、お!!」

教会の関係者かしら? 以前お会いした教会の司教様のような服装……いえ、それよりもっと位が高そうな……だけど司教様と同じ年代のお爺様ですわ。

「フェリクス……、フェリクスや……つ、無事で良かった!」

「にや!」

お爺様は立ち上がり、涙目になっている。ペーちゃんは必死に手を伸ばしているが、抱っこ紐の

中なのであまり身動きができない。そのため、ノアが横を向いてペーちゃんが見やすいようにしてあげている。わたくしの息子、なんて優しいの!

「イザベル、ノア。こちらはクレオ大司教でいらつしやる。挨拶を」

テオ様がこちらへやつてきて、お爺様を紹介してくれたのですけれど……

だ、大司教ですつて!?

地球で言うところのアルバというのかしら、聖職者らしい、足首まである白くて長い前開きの服の上から、同じ白いマントを羽織っている。ほっそりした好々爺で、立派なお髭をたくわえた姿はサンタクロースのようだ。

この方が大司教……

確かに品のあるお顔立ちと振る舞い、そして権謀術数渦巻く場所で生きてきた人が出す独特の雰囲気。大司教と言われれば納得できるけれど……

「うりえお……」

目をうるうるさせ、手を伸ばすペーちゃん。この子は、大司教のお孫さんだったのね。

「お初にお目にかかります。わたくし、テオバルドの妻、イザベル・ドーラ・ディバインと申しますわ。この子は息子の——」

「おはちゅに、おめに、かかります。でいばいんこおしゃくけ、ちやくなん、ノア・きんばりい・でいばいん、です」

まあ、スラスラと自己紹介できるようになつて! ノアったら天才ですわ!

「はい、お初にお目にかかります。ディバイン公爵夫人、公子様。私はクレオと申します。帝都の教会で大司教などと呼ばれておりますが、ただの爺じいです。ですのでそのようにかしこまる必要はございませんぞ」

ニコニコと優しい笑みを向けてくださるけど、大司教ってそんなフレンドリーにお話しできる方ではございませんわよね!? 教皇、枢機卿すうききやうに続く、教会のナンバー3ですもの。

「公子様、フェリクスのお世話をしてくださっていたのですね。ありがとうございます」

「ふえ……、ふえり、くちゅ?」

「ホホッ、公子様が抱っこしている赤ちゃんの名前ですな」

「――? このこ、ペーちゃんよ?」

「ほっ? ペーちゃん、ですか」

「そうです! ペーちゃん」

あらあら、ノアったらペーちゃんの本名に戸惑っておりますわ。まあ、ノアの気持ちもわかりますけれど。ペーちゃんの本名がフェリクスだったとは思いませんでしたもの。てつきりペーターとか、ペがつく名前なのだと思っておりましたわ。

「うりえお、ぺえちゃ」

「ふむふむ。なるほど。フェリクスが公子様に、ペーちゃんだと教えたようすな」

「はい!」

クレオ大司教、ペーちゃんの言葉がわかりますの!?

「でしたら、ペーちゃんの間違いない。フェリクス、いえ、ペーちゃんが、公子様に大変お世話になったようですから、お礼を言わせてください」

「ペーちゃんね、わたしの、おとおと、です。だから、だいじよぶです」

「そうでしたか。フェリ……ペーちゃんを、弟のように可愛がってくださいなのですね」

穏やかな優しい声でお話してくれる大司教に、ノアはあつという間に懐なついてしまいましたの。

なんとなく、わたくしのお父様に空気が似ているのも要因なのかもしれない。

「ただ、いらっしやっているのはクレオ大司教お一人のようすわ。親御さんはどうしたのかしら。」

「ディバイン公爵夫人、フェリクスには父母はおりません」

「え、あ……、そうでしたの……」

クレオ大司教はわたくしの考えていることがわかったようで、先回りして教えてくださった。

「申し訳ございませんわ……」

「ほ? なにを謝あやまられることがありますか」

「わたくし、不躰ふしづな視線を送ってしまったようで……」

「おやおや、そのようなことはありませんぞ。こちらこそ誤解させてしまいましたな」

大司教の穏やかな笑みに、つい、こちらの口元も綻はなんでしまいましたのよ。

「フェリクスや、そろそろこちらにおいで。公子様がお疲れのようすぞ」

「にや……によあ」

「わたし、だいじょぶよ」

ノアがペーちゃんを離れたがらないため、クレオ大司教は困ったように眉尻を下げた。

「ノア、ペーもお前と同じように、家族のもとへ帰りたいと思っっているはずだ」

そこへテオ様が諭すように声をかける。ノアはテオ様を見て目を潤ませると、腕の中にいるペーちゃんを見た。

「……ペーちゃん……」

「によあ……あい、あつちよ！」

ペーちゃんは、ノアのほっぺにペタッと小さなおててをくつつけると、なにかを言ったのだ。

「公子様、ペーちゃんは公子様に、ありがとう、と言っておりますぞ」

まあ、あれはお礼を言っていたのですか!? 可愛い!! ノアのほっぺをペタッと触るペーちゃんも、それにきよんとするノアも、なんて可愛い二人ですの!

「ペーちゃん……っ、わたし……っ、わたし、も、あり、がと」

ノアは涙を必死に堪えて笑う。その様子が健気で、わたくしはもらい泣きしそうになりましたのよ。

「にゃ!」

「うふふっ、にゃんこね」

「あう……」

ノアとペーちゃんはぎゅうつと抱き合っ、お別れの挨拶をする。

「ペーちゃん、また公子様に会いに来ましようぞ」

「あーい」

「ホホッ、いい返事ですな。ペーちゃん」

「ぺえちゃ、いつこ!」

「はいはい。ペーちゃんは良い子ですぞ」

やっぱりご家族なのね。赤ちゃんと会話が成り立っておりますもの。

「赤ん坊とは、あのようによく喋るものなのか?」

テオ様が大司教とペーちゃん、そしてノアを眺め、無表情のまま、こっそりと聞いてくる。その内容と表情のギャップが、また可愛らしい。

「個人差はありますけれど、あのように大人とやり取りできる赤ちゃんは珍しいかもしれませんわね」

「そうなのか?」

「わたくしもオリヴァーの小さな頃が基準になってしまいましたが、少なくともオリヴァーが赤ちゃんの時は、あそこまで大人の話を理解しておりませんでしたわ」

ペーちゃんはギフトドではないかしら。生まれつき高い知能や才能を持つ子供のことで、前世ではテレビなどで特集が組まれておりましたわね。

「ペーちゃんとノアが一緒に逃げた時の話を、ノアから聞いたのですが、二人とも子供と赤ちゃんとは思えない機転で、度肝を抜かれましたわ」

おそらくノアもギフテッドなのだろう。

「そうか。確かにノアの魔法は幼い頃の私をも凌駕するものだった」

「テオ様を……っ」

ノアは天才を凌駕する天才ですの!? さすがノア、前世で英雄と呼ばれただけありますわ。けど……

「二人の成人男性を一度に凍らせるのは、至難の業だ」

「恐ろしかったでしょうに、誘拐犯と勇敢に戦いましたのね……」

いくら天才であろうと、あんなに幼い子が誘拐犯と対峙し、攻撃魔法まで使用しないといけなかったなんて……

わたくしは唇を噛みしめ、拳を握った。

「……ノアはそれでも、ベルに会いたい一心で、戦ったのだろう」

「わたくしに……?」

テオ様が固く結んだ私の拳を包み込むように、優しく手を重ね、ぽつりと言ったのだ。

「子供が母親のもとに早く戻りたいと思うのは、当然のことなのだろう?」

私は子供時代、そのようなことは微塵も思わなかったが——と続きそうではあったけれど、テオ様が子供の気持ちになんとか寄り添おうとしているのが伝わってくる。

「ノアは、わたくしを母と慕ってしてくれますのね……っ」

母と認め、しかもわたくしのもとへ戻りたくて必死だったというノアを想像したら、涙が込み上

げてきた。ペーちゃんと話している息子の横顔を眺め、改めて愛しさが募る。

「それこそ当たり前だ。ノアは君が産んだ、私たちの子なのだろう」

テオ様の言葉に、以前わたくしがそう宣言した時のことを思い出す。

そうですね。ノアはわたくしの可愛い息子で、わたくしはずっと、ノアの帰る場所ですわ。なんてったって『お母様』ですもの。

いよいよお別れの時が来た。カミラに手伝ってもらって抱っこ紐を外し、大司教にペーちゃんを渡すノアの目からは、今にも涙が溢れそう。

「ペーちゃん……ぐす……っ、またね」

「うえ……っ、うゝ、によあっ」

鼻水を垂らし、とうとう涙が溢れ出たノアがゆっくり離れると、今度はペーちゃんがぐずり出す。あれだけノアに懐いていたのだから、離れたくありませんわよね。

大司教があやしているが、ペーちゃんはノアに手を伸ばして泣き続ける。

「ペーちゃん……っ、あしよび、きてね」

鼻の頭とほつぺたを赤く染めたノア。その目から次々と涙の粒がこぼれ、それを見たペーちゃんもまた激しく泣き出した。

「うあゝっ、によああ」

「これこれ、フェリクスや。今生の別れでもあるまいて」

「によ、あゝ!!」

ペーちゃんの大絶叫にも動じず、優しく、優しくあやす大司教の対応は尊敬に値する。

「よしよし、また来ればよい。のう、フェリクスや」

クレオ大司教は、本当にお優しいおじい様ですね。

こうして、ペーちゃんは人生初の、ノアはアベラルド様以来の涙のお別れを経験したのだ。この別れがまた、ノアを成長させるのだわ。

クレオ大司教とペーちゃんが教会に帰ってしまった翌日――

「いやはや、ペーちゃんが会いたいというさいもので。本当に申し訳ありませんあ」

「まあ……」

涙なしには語れない別れをしたというのに、ノアとペーちゃんは今、公爵家の客間で、楽しそうに積み木で遊んでいた。どうやら昨日はディバイン公爵領都の教会にお泊まりになったそうで、本日にもまた遊びに来てくれたのだ。

こんなことなら、我が家へお泊まりいただければ良かったですわ。

「ペーちゃん、さんかくちゅみき、どうしゅる?」

「うゝ……にや!」

「ここ、おくの?」

「にや!」

『アオ、シカクノ、ツミキ、ココオク!!』

少々呆^{あっけ}気に取られているわたくしをよそに、本人たちは昨日の別れなどなかったかのように積み木に夢中だ。子供って、切り替えが早いですわね。

「……ディバイン公爵夫人、実はお願いがあのです」

「え?」

姿勢を正し、かしまった態度でわたくしを見る大司教に、思わず動揺する。

大司教のお願いってなにかしら!? テオ様が今日はいらっしやらないのだけど……

「フェリクスを、しばらくこちらで預ってもらいたいのです」

クレオ大司教の言ったことに驚き、口を開けたまま見返してしまった。いけない。呆^{きど}けてしまいましたわ。

でも、クレオ大司教がペーちゃんを大事に思っていることは、昨日少し接しただけでも十分に伝わってきた。そんな大切なペーちゃんを預けたいだなんて、余程深い事情があるのだわ。ペーちゃんとはご両親がいなくておっしやっていたから、お仕事の時のお世話が大変なのかしら? だけど、教会に面倒を見てくれる人はたくさんいるだろうし、ご事情を伺ってもいいものかしら……

「フェリクスは公子にとっても懐^{なつ}いておりますし、公爵家ならば安全ですから、是非お願いいたします」

今はわたくしも妊娠中であまり外出をさせてもらえませんし、仕事もウォルトが他の方に振ってしまっているの、ペーちゃんの面倒を見ることは可能ですわ。それに、もうすぐ本邸の侍女長で

あるマディソンがこちらの邸^{やぐら}に来てくれるのよね。彼女はウォルトの母親ですし、子育てのベテラン。なにかと頼りになりますわ。

「もちろん構いませんわ」

深く考えず、託児所のように素敵だわ、なんて思っただが――

「ディバイン公爵夫人、ありがとうございます。本当に助かりますぞ。……このまま教会にいれば、フェリクスはいつまた攫^{さら}われるか」

「え？」

「最悪殺されるやもしれぬのです」

「な、なんですって!？」

「ペーちゃん、命を狙われていますの!？」

「普段いるのは、きよ、教会ですよね!? 何故ペーちゃんが教会で命を狙われますの!？」

「おや? 公爵からなにも聞いていらっやしませんか……」

大司教は少し思案したあと、チラッとわたくしの肩のあたりと、子供たちの方を見る。

クレオ大司教の視線の先には、たまたま妖精たちがいたので、ドキリとした。

「公爵夫人は、『神託』というものをご存知かな?」

「神託……確か聖者に神々からのメッセージが届くことですよね?」

なにかしら、急に……

「そのとおり、神託とは神から人間へのお告げです。聖者様、聖女様の存在が確認されなくなって

久しく、約七十年前にグランニッシュ帝国にいらした聖女様が最後と言われている。その最後の聖女様が神託を受けました」

いえ、今もフロちゃんという聖女が生まれています、とは言えませんわよね。

「ご神託の内容はなんだったのですか?」

「当時聖女様が受けた神託の内容は、こう伝えられております……『夜の帳^{とほり}が下りる時、全てを見通す瞳持つ赤子立つ。その者未来を知り、信心なる者を導く』」

赤子ってまさか……

「これが七十年前にあった神託ですな。待てど暮らせど、そのような赤子は現れず、我が子こそが、と盛大に勘違いした者がいつの間にか教会に巣食ってしまったがなあ……」

遠い目をする大司教に、今まで苦勞なさったのね。と同情してしまう。

「クレオ大司教、その赤子とは……」

「お察しのとおり、ペーちゃん……いえ、フェリクスです」

「まあ……っ」

やっぱりペーちゃんが、神託の赤ちゃんでしたのね!

「では、誘拐事件はその信託の赤子を手に入れようと、教会内部の方が指示したと? それなら何故、ノアが狙われたのか……」

「公子様が何故狙われたのかはわかりませぬが、フェリクスを攫^{さら}ったのはおそらく教会内部の者でしょう。なにしろ、フェリクスの世話を頼んだシスターが姿を消してしまいましたのでな」

長年の付き合いでしたが、そやつらに取り込まれておったのでしょうか、と大司教は悲しそうに俯く。

信じていた人に裏切られて、しかもお孫さんまで誘拐されて、ご心痛はいかばかりか……

「大司教、もしかして昨日、ペーちゃんを連れ帰ってからなにかございましたの？」

「危険にさらすことのないよう、片時も離れなかったのですが……どうやらわしの飲み物に睡眠薬がまぜられるようになりましたな……」

「睡眠薬!? そ、それは、どうしておわかりになりましたの!？」

睡眠薬がまぜられていたのも驚きだが、なによりそんなものがまぜられていると、どうしてわかったのか、そっちの疑問が先に立ってしまった。

「どうしてわかったのかと申しますと、ディバイン公爵には昨日お伝えしたのですが……、私は昔から『視^みえる者』でね」

ん? 見えるってなにが?

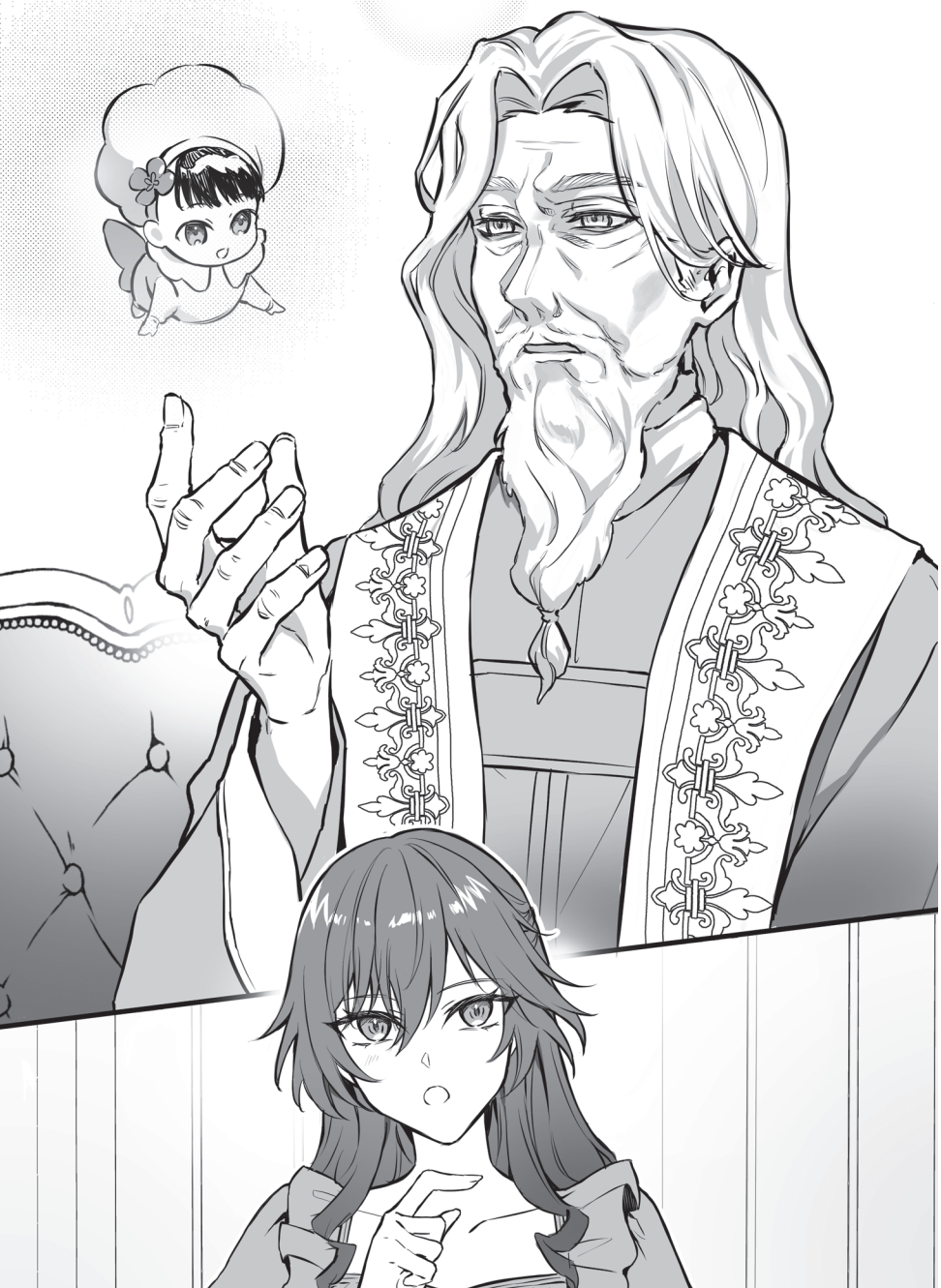
「こちらに伺った時からずっと、あなたの肩に親指ほどの小さな光が、そして公子様とペーちゃんの間の一つ、拳大の光が見えているのですよ」

「え!？」

まさかこの人、妖精が見えますの!?

『ベル、チロ、タメシテミルノ』

赤ちゃん妖精のチロがそう言ってわたくしの肩から飛び上がり、ふわふわと大司教に近づいていく。



「おや、こちらに来ていただけなのですか？」

『ホントーニ、ミエテルノ〜』

クレオ大司教が、視える人でしたの!?

驚いている間にも、クレオ大司教の話は続く。

「七十年以上前……、私がまだ子供だった頃、私は神官見習いだったのですが、この能力を買われて、聖女様の身の回りのお世話をさせていただくことになりましたね」

にっこり笑い、大司教はこう言った。

「聖女様の近くにも、小さな光が寄り添うようにしてあったのを覚えています」

「では、その小さな光が、睡眠薬がまぜられていると教えてくれたのですか？」

「いいえ。私は視ることはできても、声を聞くことはできませんのね。ただ、小さな光たちは、この飲み物は飲んで駄目だと言うように、私がグラスを掴もうとすると邪魔をしてくるのです」
そういうことでしたのね。

「もしやと思い、中身を調べると睡眠薬だとわかりました。これはいかんと、急遽フェリクスをこちらに連れてきた次第なのです。もちろん公爵には昨夜の時点で手紙をやり取りさせていただき、了解は得ておりますが、最終的な判断は奥方に任せるとおっしゃられておりました」

「まあ、テオ様がわたくしに任せると？」

それならそうと、おっしゃってくだされば良かったのに。

緊張感のある話とは裏腹に、クレオ大司教は穏やかに微笑み、わたくしの返事を待っている。

ディバイン公爵家の邸^{やしき}なら教会も手を出せないと考えているあたり、公爵家に絶大の信頼を置いているようだ。

ミランダに視線を向けると、彼女は一つ頷き、なにやら口を動かす。声は出ていないのだけど多分、影——ひそかにこの家に仕える者たちになにかを伝えているのだと思う。

ノアの誘拐事件で、邸^{やしき}のセキュリティを見直したばかりだ。

いつの間にかノアにちよつとマッチョなメイドさんがついていて驚きましたわ。すごく体格がいのよね。隠れマッチョ好きのわたくしは、同性でもドキドキしてしまいますわ。

「では、大司教もこちらにご滞在なさってはいかがでしょうか？」

「いえ、私自身がこちらにお世話になるのは、体裁^{ていざい}が良くないのです。今教会を刺激するわけにはいきませんからな。これ以上公爵家にご迷惑をおかけするわけにはまいりません」

「ペーちゃんが寂しがってしまいますね……」

ペーちゃんはまだ赤ちゃんですもの。いくら神託の子だとしてもおじい様と離れるのは寂しい……って、あら？ 『夜の帳^{とまり}が下りる時、全てを見通す瞳持つ赤子立つ。その者未来を知り、信心なる者を導く』っていう神託のとおりなら、もしかしてペーちゃんって、未来予知みたいなことができますの!?

「によあ、ぺえちゃ、にやか、くう……」

「ペーちゃん、どうしたの？」

「くう……」

ペーちゃんが、ノアになにかを訴えている。おててをお腹に当て、切なそうな顔。もしかして……

「ペーちゃん、お腹が空いたのかしら？」

「ぺえちゃ、くう」

わたくしを見上げ、こくと頷くペーちゃん。ノアもわたくしを見上げ、どうにかしてあげてという顔で見つめてくる。まるでチワワのような二人にニヤけてしまう。立ち上がってペーちゃんを抱っこし、大司教のところへ戻ると、ノアもわたくしのあとをトコトコついてきた。

「クレオ大司教、ペーちゃんにおやつをあげてもよろしいでしょうか？」

「お願いしてもよろしいのでしょうか？」

「もちろんですわ」

たまごボーロがいいかしら。おいものおやつや、赤ちゃん用のドーナツもいいですわね。ノアも一緒に食べられますもの。

「ミランダ、赤ちゃん用のおやつとして、たまごボーロとドーナツ、あとはおいもを使ったものをパティシエに頼んでもらえるかしら。もちろんノアのものも一緒に」

「かしこまりました」

クレオ大司教は、「くりえお……ぺえちゃ、くう……」とおなかをさするペーちゃんを、「そうですね。ペーちゃんのお腹で熊さんが唸^{うな}っておりますぞ」とからかっていた。

「ぺえちゃ、わんわ、いい！」

「ホホッ、ペーちゃんは熊さんよりワンワンがお好きか」

「あーい」

あら、ペーちゃんは犬が好きですね。

「ペーちゃん、わんわんすき？ わたしもよ」

「によあ！」

「わたしのうち、わんわん、いるのよ」

「わんわん!!」

「にや、ナラと、じゅーく！」

あらあら、ノアったらこの間はデュークもちゃんと言っていましたのに、またじゅーくに戻っていますわ。可愛い。

「にやあ、ちよ、じゅうつ、きゅー！」

「しようよ。とーつても、かちこいの！」

「ぺえちゃ、いちゃい！」

痛い？ え、ペーちゃんどこか痛いんですの!?

「ほう、ペーちゃんはナラとデュークというワンちゃんを見たいのですかな」

「あーい」

あ、そういう……良かったですわ。てつきりどこか痛むのかと……

「ペーちゃん、おやちゅ、たべたら、いっちよ、ナラと、じゅ、でゅーく、みにいくのよ！」

「にゃ!!」

あらあら、ノアもペーちゃんも嬉しそう。ただ、ウチのわんわんは、ちょっと強面こわもてですよ
ね……。ペーちゃんが怖がらないといいのだけれど。

おいもを使った優しい甘さのおやつや、たまごボーロが机に並べられると、ノアもペーちゃんも
大喜びで席につく。一番喜んでいたのは妖精たちですけれど。

「うゝ、ちい! くりえお、あいつ」

「私にもくださるのですね。んゝ美味おいしいですなあ。このじーじにも食べられるおやつですぞ」

「あーい!」

ペーちゃんがたまごボーロを食べて、美味おいしい! と満面の笑みを浮かべる。次いでクレオ大司
教にも食べさせてあげる優しい姿は、見ているだけで顔が綻ほころぶほどほっこりする。

「あのね、おやちゅ、おかあさま、かんがえたのよ!」

「ほう! 公子のお母様は天才パティシエですな」

「しようよ!」

ノアったら。胸を張る息子の姿が愛しすぎて困る。

ノアは赤ちゃんも食べられるフレンチトーストを美味おいしそうに頬張り、ペーちゃんにもあーん、
をしてあげていた。

「ふおゝつ、ちゅき! きよえ、うゝ、ちい!!」

ペーちゃんが、きな粉と豆乳で作ったフレンチトーストを食べた途端、キャッキヤとはしゃぎ出
す。

最近発見されたばかりの大豆だいず。なんと隣国リツシユグルスのユニヴァ第二王子が見つけて、届け
てくれたのだ。愛する弟のために、常日頃美味おいしい食材や料理を探し歩いていると聞いたテオ様が、
わたくしのために『お米』を探そう依頼してくれましたの。それがきっかけでたまたま大豆だいずが発
見されましたのよ。ユニヴァ王子には感謝しかありませんわ。安全性を確認したあと、きな粉や豆
乳にして、パティシエにお菓子にしてもらったが、喜んでもらえてなによりだ。

「好き、これ美味おいしい!」 と言っておりますな。かなり気に入ったようです」

ホホッとサンタクロースみたいな笑い声を立てて、ペーちゃんの言葉を通訳してくれる大司教。
この方、読心術でも使えるのかしら。

「ディバイン公爵夫人、よろしければ、後ほどレシピを教えていただけないでしょうか」

皇帝陛下と同じことを言っておりますわ。やっぱり子供を持つ親や祖父は同じ思考になるのね。
可愛い我が子に美味おいしいものを食べさせたいのだから。

「ではお帰りの際、レシピと使用する食材をお渡しいたしますわ」

「ほ? 食材、ですか?」

「ええ。こちらはまだ広まっていない、新種の豆を使っておりますので、他では手に入りませんの。
あ、身体に悪影響はございませんのよ。むしろ身体にいいものですから安心なさって」

「そ、そんな貴重なものはいただけません!」

クレオ大司教は恐縮しているが、わたくし、大豆を世界に広めたいのですわ！ 折角ユニヴァ第二王子が発見してくださったのですもの。

「大司教のような影響力のある方に食べていただけると、他の方も食べやすくなると思いますの。これからどんどん広めていきたいので、是非ご協力くださいませ！」

「協力ですか？ 私だけが得しているような気がしますがあ」

「そんなことはございませんわ」

わたくしにもメリットはたくさんありますもの。

「そうですか……では、お言葉に甘えることにいたしましょう。デイベイン公爵夫人、ありがとうございます」

◇ ◇ ◇

「フェリクス、我儘を言つてはなりませんぞ。それと、好き嫌いはしないように。かんで……アレも使わぬようにな」

「う、あーい」

「フェリクス、面倒という顔をするでない。そうそう、荷物はメイドに預けております。夜に使うお気に入りのぬいぐるみも、おしゃぶりも持ってきておりますからな」

「うあ!? ちいーつ、によあ、いきや、めっ」

「公子様に聞かれたら恥ずかしいですと？ ホホッ」

あらあら、本当に仲がよろしいのね。

大司教がお帰りになる前に、ペーちゃんに色々と言ひ聞かせておりますが……大司教、ペーちゃんはまだ赤ちゃんですわよ？ そんなに話してもわからないんじゃないかしら。

「じーじとは少しの間会えぬが、しばらく辛抱しておくれ」

「くりえお……」

「大丈夫。一旦帝都の教会に戻って、『大掃除』をしてから迎えに来ますのでな」

大掃除？ 大掃除って先程おっしゃっていた教会内部のペーちゃんを狙う輩の一掃、という意味ですわよね……けれどそれだと、時間がかかりそうですわ。そんなに離れてペーちゃんは大丈夫かしら……

「くりえお、いーちよ……」

「一緒には行けませぬよ。危険です」

「にや……」

「フェリクス、あなたは安全なところにいて、私を安心させてください。それだけで、このじーじは元気になれますので」

ペーちゃんは、クレオ大司教としばらく会えないということがわかってるようで、涙目で大司教に手を伸ばして、あああと言う。なんだか可哀想になつてくる。

「ではデイベイン公爵夫人、フェリクスをよろしく願います」